

## 文語日誌

田園調布にて茶苑文語教室を終へ、東横線にて綱島驛まで戻り、東急バスに乗換へて歸宅す。自宅最寄りのバス停は些か寂しき處なり。此處より自宅までの近道は急なる階段あり墓地有り竹林有りの小徑にて、街燈も無く寒き夜に通るには心地良からず。「南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經、ノウマクサマンタバサラダン…」等と唱へつつ急ぎ足にて通り過ぎぬ。

自宅のマンションに到着、エレベータにて七階に著く直前、エレベータ突然ドシンと揺れ停止し、階數表示ボタン總て點燈す。

「地震なりや」

「エレベータに閉ぢ込められたくは無し」

と思ふ内に緩々ゆるゆるながら七階に到着、ドアも無事開けり。

自宅に入り、家内に

「先ほど地震ありや」

と問へど、

「否」

との事、テレビを點けたれど地震速報の放送は無し。

前日エレベータの點檢ありし事思ひ出し、其の所爲せゐなりやと思へり。日本エレベータ製との表示あり。是は彼のシンドラ社シンドラの物と聞きけり。

歸宅三分後、突然部屋の燈り總て消ゆ。窓外見るに周圍の建物には停電無し。廊下の電燈も異常無ければ、原因は自室のブレーカーなり。懷中電燈取り出し、ブレーカーの箱開きスイッチを入れたるも何故か點燈せず。マニュアルを見つつの再度の試みにて漸く電氣回復す。

一段落して考ふるに、ブレーカーの落つるは通常電氣ヒーター等何らかの電氣器具のスイッチをオンにすると同時に發生する物にて、先程の様に突然落つるは不可解なり。又、電氣器具の使用がアンペアの許容限度を超えたりとも思はず。

假説として、先程バス停よりの歸路にて少々背筋寒き思ひせし事、或は關連有るに非ずや。例へば竹林の揺れにて靜電氣發生し余の體に帶電、此れがエレベータやブレーカーの誤作動に繋がりたるにや。